
共通お題『背中』～オーサムコーラル国物語2～

しろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

共通お題『背中』／オーサムコーラル国物語2／

【Nコード】

N1915A

【作者名】

しろつ

【あらすじ】

オーサムコーラル王国の迷いの森にすむ、双子の魔法使い、アーネリーフとローズリーフのお話第一部からさかのぼる事八年前の出来事です。幼いアーネリーフと、無口の地竜オロフィンの出会いは、ほんの偶然でした。興味のある方は、第一部をごらんください。

それは、8年前の物語…………。

*

世界でもっとも栄えるクルト王国より南に、暑い暑い死の砂漠を抜け、さらに、天にもとどろくけわしい山々をこえた先には、深い森がある。

その方角すらも狂わせる迷いの森のどこかに、竜や精霊、獣人、人間など様々な人達が仲良く暮らす、オーサムコーラルという国があります。

この物語は、そんなオーサムコーラルの迷いの森に暮らす双子の魔法使い、アーネリーフとローズリーフのお話です。

《オーサムコーラル国物語》

第二部・背中

双子の姉弟、アーネリーフとローズリーフの家は、いつも寂しげに迷いの森の中にポツンとたたずんでいた。

小さな木の家に住んでいるのは、父親と双子の三人であったが、父親は、城に使える優秀な魔法使いである為、ほとんど家には寄り付かなかった。

その代わり、幼い双子の面倒を見るのが、近所の——といっても、迷いの森の外にある、村に住んでいるのだが——獣人・クスラであった。

「さあさ、アーリイちゃん、ローリイちゃん、お昼ご飯ですよ」
ふさふさとした短いしっぽをゆらしながら、クスラは、頭が痛くなるようなぶ厚い本を読んでいる、幼い双子に声をかけた。

「はい」

先に反応したのは、姉のアーネリーフだ。

アーネリーフは、まだ、本に集中して動かない弟の手を引っ張ると、

急かすように言った。

「ローリイ、本は後にして、早く食べましょ。クスラおばさんを待たせたら悪いわ」

「んー……」

ローズリーフは、名残惜しいのか、ぐずったが、姉の言うことは最もだと、立ち上がった。

「わぁ、おいしそう！」

双子は、食卓を見ると、感嘆の声をあげた。
食欲をくすぐるシチュウの匂いが部屋にたちこめる。

木の皿には、サラダ、それに、双子の大好物のブドウパンが並んでいた。

「二人とも、イスに座ってお上がり」

二人の嬉しそうな表情を見て、クスラは満足そうに笑って、子ども達の小さな皿に、たっぷりとしチュウを注いだ。

「いただきますっ！」

双子は、元気よく言うのと、飛びつくようにシチュウに手を伸ばした。

「おいしい！」

「おかわりはあるからね。たんとお食べ」

「はぁーい！」

双子は、楽しげに、元気よく返事をした。

*

「ローリイ。お外に行かない？」

食事の後、三人で片づけをしてから、再び、読書に戻った双子だが、分厚い本を半分までめくった所で、アーリイ——アーネリーフは、隣にいる、弟のローリイ——ローズリーフに話しかけた。

「ん……。もうちょっと……」

ローズリーフは、本から目を離すことなく答えた。

それを見たアーネリーフは、一つのものに集中したら、他のものが見えなくなるのは自分も同じ事だと、ローズリーフと遊ぶ事はすぐにあきらめ、立ち上がった。

「分かった。ちょっと、お花つんでくるね」

「ん……」

アーネリーフの言葉を聞いているのか、聞いてないのか、ローズリーフは、気のない返事をした。

アーネリーフは、小さな肩をすくめ、一人、木の家からでるのだった。

*

ローズリーフが、本に没頭している頃、外にでたアーネリーフは、森の中を北の魔法使いであるルーデンベルクの元に向かっていた。家にこもり、ずっと本を読んでいたせいか、体がこわばり、目もぼんやりとするため、とりあえず、外の空気を吸おうと、とびだしたものの、行くあてが、声も忘れてしまった父親の友人、ルーデンベルクしか思いつかなかったのだ。

「……………」

それに、ルーデンベルク宅には、薬草がたくさんある。

目的のお花摘みもはたせるし、最近、薬草にこりつつあるローズリーフも喜ぶだろう、と、アーネリーフは、駆け足で走りはじめた。

「……………」

しばらく進むと、道から外れた木陰に、黒髪の男が、うつむいて座り込んでいるのが見えた。

「……………」

アーネリーフは、興味がわいたものの、クスラから、知らない人について行ってはいけない、と言う言葉を思い出し、急いで走りぬけた。

「……………」

通りすぎる瞬間、ちらりと、男の顔を見る。

「……………」

少し顔色が悪いようだった。

「……………」

男の姿が見えなくなつて、アーネリーフはやっと立ち止まった。

ルーデンベルクの家はすぐそこだ。

クスラの言いつけを守って、ここまできたものの、アーネリーフは、さっきの若い男が気になってしょうがなかった。

「どうしよう……。あの人、大丈夫かな」

大きな背中では、記憶の中にある父とかさなって見えた。

「……」

あのまま、父の様に消えてしまうのではないかと、アーネリーフは、怖くなってふりむいた。

父は、めったな事では、家に帰ってこない、城仕えの魔法使い。そう言えば、あの若い男も、重そうな黒いローブをまとっていなかったか。

「！」

アーネリーフは、はっと、クスラの言葉を思い出した。

「……困ってる人は、助ける」

アーネリーフは、そうつぶやくと、勢いよく走り出した。
ルーデンベルクの家に向けて。

*

「あの！」

息をきらしながら、アーネリーフは、黒髪の男に話しかけた。

男は反応しない。

まるで、アーネリーフの声が聞こえてないかのように。

「これ」

アーネリーフは、水が入ったコップをさしだした。

男は、やっとのろのろと頭をあげた。

「走ってきたから、ちよつとこぼれちゃったけど……」

アーネリーフは、恥ずかしそうに笑った。

男は、不思議そうに、水が半分しかはいつてない、コップを眺めている。

「大丈夫？どこか痛いのか？」

アーネリーフは、コップを受け取ろうとしない、男を見て、首を傾

げた。「そっだ！」

アーネリーフは、ぱつと、目をかがやかせ、男に近づき、コップを握ったまま、男の背中に手をまわした。

「痛い時はね、こうするといいいんだって。クスラおばさんが言ってた」

アーネリーフが、ぎゅっと抱きつくと、男は、驚いて、体をこわばらせた。

アーネリーフは、すぐに離れ、再びコップをさしだした。

「これ、飲んで。あのね、私アーネリーフ。魔法使いのお勉強してるの」男は、戸惑いつつも、そのコップを受け取った。

「それでね、今から、ルーデンベルクのおじ様の所に行くの。だから、一緒にいこう」

アーネリーフは、微笑えんで言った。

男は、相変わらずきょとんとしている。「ルーデンベルクのおじ様はね、魔法使いなの。薬草に詳しいから、きっと痛いのが治るよ」

アーネリーフは、男に、手をさしのべた。

しかし、男は、コップを持ったまま、固まっている。

アーネリーフは、動こうとしない男の手をとり、言った。

「大丈夫。ルーデンベルクのおじ様の家はね、すぐそこなの」

アーネリーフは、森の木漏れ日の向こうを、指差して言った。

「……………知っている」

と、男は、ぼそりとつぶやいた。

「え？」

アーネリーフは、聞きとれず、男の顔を覗き込む。

「さっき、通りすぎたのも、知っている」

男が、突然話し出したので、アーネリーフは、びっくりして、答えた。

「見てたの？…………あのね、知らない人についていたらダメだって、クスラおばさん言ってたの」

アーネリーフは申し訳なさそうに、笑った。

「なぜ、戻ってきた？」

男は、アーネリーフの顔をじっと見つめながら、言った。

アーネリーフは、不思議そうに頭をかしげながら答えた。

「だって、困った人は助ける、でしょ？」

迷いのない答えに、そうか、とうなずき、男は、コップの水を飲み干した。

「……フィン」

「俺の、名前」

男のとうとつな言葉に、驚いたものの、アーネリーフは、嬉しそうに笑いながら言った。

「私、アーネリーフ」

「……知っている。迷いの森に住む、双子の魔法使い。弟は、ローズリーフ」

アーネリーフは、目を見開き、男を見上げた。

「どうして知ってるの!？」

男は、ちらっと、目をそらしてから、答えた。

「……ルーデンベルクから聞いた」

「おじ様のお友達なの？」

アーネリーフは、言った。

「……そんな、ところだ」

二人は、ルーデンベルク宅につくまでの短い道のりを手をつないだまま、歩いた。

それを見て、人のくえない、白髪のみじりの北の魔法使い・ルーデンベルクが、さんざん、男をからかうのも、弟の元に男の手をひいて連れて行くのも、そして、アーネリーフが、コップをさしだし、抱きしめた相手が、人間嫌いの偉大なる地竜・フィン——オロフィンだと知るのも、まだ少し、先のお話し。

《おしまい》

（後書き）

やっと、オーサムコーラルが初期設定通り、ほんわかファンタジーになった……。

やったよ、俺は、やったよ!!

ご購入ありがとうございます。

次回作も、読んでくださると光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1915a/>

共通お題『背中』～オーサムコーラル国物語2～

2010年10月20日19時33分発行